

社会主義期ルーマニアの『史学雑誌』に表明された 西の隣国と異なる歴史認識

—ハンガリーの『トランシルヴァニア史』(1986年)への反論をめぐって—

中島 崇文

はじめに

近年、世界各地で隣接する国々の間での歴史認識の相違の問題がクローズアップされている。ヨーロッパにおいては第二次世界大戦の苦い経験の記憶からドイツとフランスまたはドイツとポーランドあるいはドイツとチェコの間でこれを克服しようとする試みがなされてきていることが知られている¹が、1990年代に激しい内戦が勃発した旧ユーゴスラヴィア諸国においても紛争の主要な要因の一つは歴史認識の違いによるものであるとして、歴史の共通の副教材が出版される²などの活動が行われるに至っている。

上述の国々での動きについては日本においても比較的知られるようになってきているが、その他の周辺諸国については研究の蓄積は未だ十分ではない。そこで、本稿は旧ユーゴスラヴィアの隣国であるルーマニアを取り上げることとする。同国の中央から北西にかけて広がるトランシルヴァニアと称する地方は、中世以来、第一次世界大戦が終わる時期まではハンガリー領であったため、今でも人口の2割弱はハンガリー人が占めており³、この地域をめぐって両国間の対立は根深いものがある⁴。とりわけ社会主義期末期には

¹ 例えば以下を参照。ベーター・ガイス、ギヨーム・ル・カントレック監修（福井憲彦、近藤孝弘監訳、加納教孝、北村春子、木邑洋子、シドラ房子、島村賢一、高橋文子、水野明美訳）『ドイツ・フランス共通歴史教科書【近現代史】—ウィーン会議から1945年までのヨーロッパと世界—』明石書店、2016年。Borodziej Włodzimierz「講演1972年から2007年におけるドイツ・ポーランド共同教科書委員会（特集 国際シンポジウム 歴史認識と歴史教育—歴史教科書をめぐる議論とドイツ・ポーランド接近の道—）」『関西大学人権問題研究室紀要』第56号、2008年、31～44頁。また、以下のように新聞の中で現在の状況が取り上げられることもある。喜田尚「「シンドラーの工場」保存へ：映画の舞台 チェコで7年野ざらし—大戦後、ドイツ系住民を追放—市民レベルで交流 和解へ動く—」『朝日新聞』2017年1月4日、8面。

² これも邦訳されているが、それは以下の文献である。南東欧における民主主義と和解のためのセンター（CDRSEE）企画、クリスティナ・クルリ総括責任（柴宜弘監訳、黛秋津、石丸由美、香坂直樹、中島崇文、百瀬亮司、木村真、井浦伊知郎、山崎信一訳）『バルカンの歴史』（世界の歴史教科書シリーズ37）明石書店、2013年。

³ 2002年のルーマニアの国勢調査の結果によれば、トランシルヴァニアの諸県全体の人口は722万1733人であり、そのうちルーマニア人は539万3552人（74.7%）、ハンガリー人は141万5718人（19.6%）であった。（Pavel Pascu, “Studiu privind structura etnică a populației din Transilvania conform celui mai recent recensământ efectuat în anul 2002”, 2010, p.8. (<https://ja.scribd.com/doc/43437932/Structura-Etnica-a-Populatiei-Din-Transilvania> (2017年1月9日閲覧)))

⁴ 拙稿「トランシルヴァニアのハンガリー人問題—言語・教育面における複数民族の共存と分離—」（第46章）六鹿茂夫編著『ルーマニアを知るための60章』（エリア・スタディーズ66）明石書店、2007年、302～306頁。

トランシルヴァニアをめぐる二国間関係は悪化の一途を辿っており、ヨーロッパ全体の中では東部のカルパチア山脈に囲まれた辺境の地であるものの、もし第三次世界大戦が勃発するならばトランシルヴァニアにおいてであるという声が聞かれることさえあったほどである。

このようなルーマニアのハンガリーとの微妙な関係を理解するための基礎的な作業の一つとして、今からちょうど30年前の1987年に焦点を当てるものとする。1986年にハンガリーで『トランシルヴァニア史』⁵と称する重要な通史書が出版されているが、その翌年、ルーマニアの*Revista de istorie*⁶（『史学雑誌』）の中でこれに対する論評が掲載されている。この中で、ルーマニアの歴史家たちによる歴史認識はどのようなものであったのかが読み取れるものと想定されるため、本稿ではこれを整理し、分析しようと試みることにする。

トランシルヴァニアの通史としてはコーシュ・カーロイの『トランシルヴァニア—その歴史と文化—』⁷が唯一の邦語文献である。日本で訳書として出版されたのは1991年のことであるが、原書ははるか昔の1934年に刊行されている。著者はハンガリー人の建築家であり、歴史家ではないが、ハンガリー人側でトランシルヴァニアがどのように認識されているのかを理解するのに手頃な図書となっている。但し、同書は必ずしもハンガリー人一辺倒の通史ではなく、この地域に分布しているザクセン人やルーマニア人の立場にも一定の理解を示しており、ハンガリーというよりも民族や文化が多様なトランシルヴァニアの独自性に傾倒するものとなっている。他方、ルーマニアの側の一般的な歴史を知るためには、1984年にフランスで刊行された著書が翻訳されたものである、ジョルジュ・カステランの『ルーマニア史』⁸が日本では最も有益な図書となっている。著者はフランスの歴史家であるが、ルーマニアの歴史学の状況をバランスよくまとめていると言える。なお、両国間の歴史学の問題に関しては、2009年、ヨアン＝マリウス・ブクルとヨヌツ・コステアが1980年代に至る何世紀もの間の歴史学の大きな流れをルーマニアの歴史家の立場から簡潔にまとめている⁹。本稿ではこれらの文献を踏まえつつ、『史

⁵ Kőpeczi Béla (szerk.), *Erdély Története*, Budapest, Akadémiai Kiadó, 1986. 3巻本となっており、第1巻は厚さ約4.5cmで「起源から1606年まで」、第2巻は厚さ約4cmで「1606年から1830年まで」、第3巻は厚さ6cm弱で「1830年から今日に至るまで」となっており、かなりの分量である。なお、ハンガリー語ではトランシルヴァニアはエルデーイと称されるため、和訳のタイトルは『エルデーイ史』とすることもできる。同書は<http://mek.oszk.hu/02100/02109/html/>からも本文が閲覧可能となっている。

⁶ Academia de Științe Sociale și Politice a Republicii Socialiste România, *Revista de istorie*, București, Editura Academiei Republicii Socialiste România, 1987.

⁷ コーシュ・カーロイ（田代文雄監訳、奥山裕之、山本明代訳）『トランシルヴァニア—その歴史と文化—』恒文社、1991年。

⁸ ジョルジュ・カステラン（萩原直訳）『ルーマニア史』（文庫クセジュ 747）白水社、1993年。

⁹ Ioan-Marius Bucur, Ionuț Costea, “Transylvania between Two National Historiographies. Historical Consciousness and Political Identity”, Steven G. Ellis, Raingard Eßer, Jean-François Berdah and Miloš Řezníkpp (editors), *Frontiers, regions and identities in Europe* (Thematic work group. 5. Frontiers and identities ; 4), Pisa, Plus-Pisa university press, 2009, pp.271-285.

学雑誌』について考察するものである。

1. 『史学雑誌』について

(1) 概要

今日、ルーマニアにおいては*Revista istorică*と称する学術雑誌が刊行されている。現在はタイトルが英語名でも記されているが、それによれば*Historical Review*である。これはルーマニアで歴史上、最も有名な歴史家であるニコラエ・ヨルガによって1915年に創刊されたものであり、首都ブカレストの「ニコラエ・ヨルガ」歴史研究所 (Institutul de Istorie “Nicolae Iorga”) の定期行物となっている。国内では多数の歴史学の雑誌が発行されているが、その中でもこれは現代のルーマニアにおいて最も権威ある学術雑誌であると言って良いであろう。

既に百年以上もの歴史を持つ学術雑誌であるが、幾度か些細な名称の変更が加えられた時期もある。最初は創刊以来、長らく*Revista istorică*であったが、第二次世界大戦後、社会主義国家になってから間もない1948年には*Studii. Revistă de știință, filosofie și arte*という名称で刊行されていた。和訳すれば『研究—科学・哲学・芸術の雑誌—』であり、「歴史」という言葉が見当たらず、諸学問の一部にすぎないかのようで、実際、歴史学が軽視された時代であったことを反映している。続く1949～1950年には雑誌名は「芸術」という言葉が削除され、*Studii. Revistă de știință și filosofie* (『研究—科学・哲学の雑誌—』) であった。1951年になると雑誌名の中に「歴史」が復活し、*Studii. Revistă de istorie și filosofie* (『研究—歴史・哲学の雑誌—』) と称することになる。さらに、1955年にはさらに*Studii. Revistă de istorie* (『研究—歴史の雑誌—』) へと名称変更がなされ、「歴史」で単独の雑誌となったことが伺える。その後、1974年には*Studi*という言葉が削除され、「雑誌」という単語の*Revistă*に定冠詞がついてサブタイトルがメインのタイトルに戻り、*Revista de istorie* (『歴史の雑誌』) となり、社会主義体制が崩壊する1989年12月まで続くことになる。英訳すれば*Review of History*ということになる。ポスト社会主義期に関して言えば、1990年に入ると早速、創刊時に戻って「歴史」という単語が名詞から形容詞へとなって*Revista istorică*¹⁰となり、今日に至っているのである。本稿では*Revista de istorie*という名称時のものを取り上げることになるが、『史学雑誌』として記載することとする。

1990年以降は表紙には「ニコラエ・ヨルガ」歴史研究所の正面から見た建物のイラストが描かれている (写真1) が、社会主義期には表紙に目次の抜粋も記載されていた (写真2)。刊行頻度についていえば、現在は年3回であるが、創刊時からしばらくは毎月、

¹⁰ 1990年以降は表紙に「創刊者：N・ヨルガ」という記載も加えられている。



写真1 1990年1月号の表紙
(2017年1月9日、中島撮影)

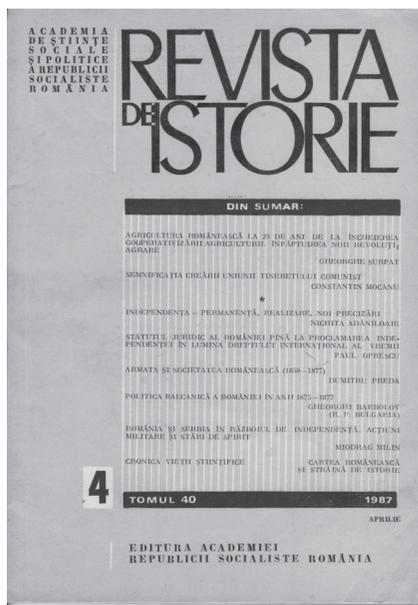


写真2 1987年4月号の表紙
(2017年1月9日、中島撮影)

1948～1954年は年4回、1955～1973年は年6回、1974～1989年は毎月となっている¹¹。いずれにせよ頁番号は年ごとに通し番号で付されている。但し、1980年代には国の経済状況が全般的に悪化していったことの一つの表れか、毎号の頁数が減少しており、厚さは5mm程度のみのももあり、1983年以降には背表紙は付けられなくなっている。なお1971年の第4号よりフランス語による目次のページも設けられている。

社会主義期にはルーマニア社会主義共和国アカデミー出版社が刊行していたが、同時代に同出版社から出版されていた、その他の歴史学関連雑誌としては*Revue roumaine d'histoire* (『ルーマニア歴史雑誌』)、*Studii și cercetări de istorie veche și arheologie* (『古代史・考古学雑誌』)、*Dacia, Revue d'archéologie et d'histoire ancienne* (『ダキア：考古学・古代史雑誌』)、*Revue des études sud-est européennes* (『南東欧研究雑誌』)、*Studii și Cercetări de Istoria Artei* (『美術史研究』)、*Revue Roumaine d'Histoire de l'Art* (『ルーマニア美術史雑誌』)が挙げられる。古代史にも重点が置かれていたこと、南東欧史で一つの雑誌が刊行されていたこと、社会主義期ながらも半数以上がフランス語によるものも刊行されている¹²ことが注目すべきところである。

¹¹ Ion Apostol, "Cuvînt înainte", Biblioteca Centrală Universitară din București, *Revista de istorie: Indice bibliografic (1948-1985)*, București, 1989, p.VII.

¹² ルーマニアの歴史学について西欧でも知られるようにするという意図があったとされている。

(2) 内容と傾向

では社会主義期の『史学雑誌』(*Revista de istorie*)の中身を見てみよう。構成については時代によって多少の変動もあるが、目次を見ると概ね「ルーマニア史」(*Istoria României*)、「世界史のページ」(*Pagini de istorie universală*)、「文書史料」(*Documentar*)、「現代歴史学の諸問題」(*Probleme ale istoriografiei contemporane*)、「書評」(*Recenzii*)、「学術活動報告」(*Cronica vieții științifice*)、「国内外の歴史書」(*Cartea Românească și străină de istorie*)という形になっている。

中には特集号となっている号も少なくないが、その場合でも必ずしも当該号の内容全てがそれに該当しているわけではなく、その号に掲載されている論文のうち、その特集に該当するのは一本ないし二本に過ぎないものもある。いずれにせよ、特集の題目を列挙するだけでも歴史学の大まかな傾向をうかがい知ることができる。社会主義期後半の1964～1989年に関し、本稿執筆時に入手し得ている号のうち、特集号として題目が目次に明記されているものを一覧表にすると以下の通りとなる¹³。

1964年第3号	1514年農民戦争450周年 1864年農業改革百周年
1964年第4号	1944年8月23日—ルーマニア民族の歴史の決定的な転機—
1964年第5号	第1インターナショナル創設百周年
1964年第6号	ブカレスト大学創立百周年
1965年第2号	人民系政権成立20周年
1965年第3号	ヒトラー主義への勝利20周年
1965年第5号	ルーマニア共産党全国大会20周年
1965年第6号	ニコラエ・ヨルガ没後25周年
1966年第1号	ルーマニア合同公国に関する研究報告
1966年第4号	宮内相コンスタンティン・カンタクズィーノ没後250周年
1966年第5号	ミハイル・コガルニチェアヌ没後75周年
1966年第6号	ルーマニア社会主義共和国アカデミー百周年
1969年第4号	1944年8月の反ファシスト暴動25周年
1970年第2号	レーニン生誕百周年
1970年第3号	ファシズムへの勝利25周年
1970年第6号	1945年ルーマニア共産党全国大会25周年 1920年ゼネスト50周年 フリードリヒ・エンゲルス生誕150周年 エフティミエ・ムルグ ¹⁴ 没後百周年

¹³ *Studii. Revistă de istorie*, 1964-1973; *Revista de istorie*, 1974-1989.

¹⁴ 1805～1870年、当時のハンガリー王国南東部出身のルーマニア人の法律家、哲学教師、1848年革命時のハンガリー革命議会の議員。

1971年第1号	トゥドル・ヴラディミレスクの蜂起150周年
1971年第2号	パリ・コミューン百周年
	ベトル・マイオル没後150周年
	数学と歴史学
1971年第3号	ルーマニア共産党結党50周年
1971年第4号	ニコラエ・ヨルガ生誕百周年
1971年第6号	歴史学の分野における戦闘的な精神の発展のために
1972年第3号	現在のイデオロギーの任務に照らした歴史学
1972年第4号	アヴラム・ヤンク没後百周年
1973年第2号	カール・マルクス没後90周年
1973年第3号	1848年のルーマニア人の革命125周年
	アレクサンドル・イオアン・クーザ没後百周年
	ルーマニアの労働者社会民主党結党80周年
	労働者単一政党創設25周年
1974年第1号	レーニン没後50周年
	エウドクスィウ・フルムザキ没後百周年
1974年第3号	ジュール・ミシュレ没後百周年
1974年第5号	ファシスト支配下からのルーマニアの解放30周年を迎える中で
1974年第6号	ファシスト支配下からのルーマニアの解放30周年を迎える中で
	労働者統一戦線実現30周年
	オスマン帝国とのヨアン・ヴォーダの闘い400周年
1974年第9号	ルーマニア共産党第11回党大会を迎える中で
1974年第10号	ルーマニア共産党第11回党大会を迎える中で
	クルージュ・ナボカ市が最初に文書で確認されてから1850周年
1974年第11号	ルーマニア共産党第11回党大会の歴史的意義
1975年第1号	ヴァスлуйでの戦い500周年
1975年第2号	ベトル・グローザ博士政権発足30周年
1975年第3号	スカイエニでの共同体住居の設置140周年
	アナ・イパテスク没後百周年
1975年第4号	ミハイ勇敢公の下でのルーマニア諸国の統一375周年
1975年第5号	ファシズムへの勝利30周年
	ルーマニア国家独立宣言98周年
1975年第6号	国際連合創設30周年
1975年第9号	フリードリヒ・エンゲルス没後80周年
1975年第12号	国際女性年
1976年第4号	ルーマニア共産党結党55周年
	ルーマニア国家独立百周年を迎える中で
1976年第11号	ヴラド串刺公没後500周年

社会主義期ルーマニアの『史学雑誌』に表明された西の隣国と異なる歴史認識
 —ハンガリーの『トランシルヴァニア史』(1986年)への反論をめぐって—

1977年第1号	ルーマニア国家独立百周年を迎える中で ペトル・ラレシュ公即位450周年
1977年第2号	1907年農民蜂起70周年 ルーマニア国家独立百周年を迎える中で
1977年第3号	ルーマニア国家独立百周年を迎える中で
1977年第4号	ルーマニア国家独立百周年
1977年第7号	マラシュティ、マラシェシュティ、オイトゥズでの戦い60周年
1978年第1号	ニコラエ・チャウシェスク同志生誕60周年
1978年第2号	ルーマニアの労働者階層の単一の政党の結党30周年
1978年第5号	1848年のルーマニア人の革命130周年
1978年第7号	第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1978年第8号	第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1978年第9号	第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1978年第11号	ルーマニア国民統一国家実現60周年
1978年第12号	第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1979年第1号	ルーマニア両公国合同120周年
1979年第2号	第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1979年第3号	第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1979年第4号	第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1979年第5号	第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1979年第6号	第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1979年第7号	ダキア人の中央集権化され、独立した最初の国家の建国2050周年
1979年第8号	ルーマニアのファシストからの解放35周年
1979年第9号	ルーマニア共産党第12回党大会を迎える中で ニコラエ・バルチェスク生誕160周年 第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1979年第10号	ルーマニア共産党第12回党大会を迎える中で 第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1979年第12号	ダキア人の中央集権化され、独立した最初の国家の建国2050周年
1980年第2号	革命民主政権樹立35周年
1980年第3号	ダキア人の中央集権化され、独立した最初の国家の建国2050周年 第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1980年第4号	ファシズムへの勝利35周年 第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1980年第5号	トゥドル・ヴラディミレスク生誕200周年 第15回国際歴史学会議大会を迎える中で
1980年第6号	ダキア人の中央集権化され、独立した最初の国家の建国2050周年 第15回国際歴史学会議大会を迎える中で

1980年第7-8号	社会主義期におけるルーマニアの歴史学の発展
1980年第10号	ボサダの戦い650周年
1981年第3号	1821年革命160周年
1981年第7号	第16回国際歴史学会議大会
1982年第2号	1907年農民蜂起75周年 80歳を迎えるアカデミー会員ダヴィド・プロダン ¹⁵
1982年第3号	共産党青年同盟創設60周年 ニコラエ・ティトゥレスク生誕百周年
1982年第5-6号	シュテファン大公即位525周年
1982年第9号	歴史と平和 マテイ・バサラブのワラキア公即位350周年
1982年第10号	歴史と平和 ジュゼッペ・ガリバルディ没後百周年
1982年第11号	歴史と平和
1983年第3号	労働者層の政党の結党90周年
1983年第10号	ルーマニア国民統一国家実現の記念日を迎える中で
1983年第11号	ルーマニア国民統一国家実現65周年
1983年第12号	ルーマニア国民統一国家実現65周年
1984年第1号	ルーマニア両公国合同125周年
1984年第5号	社会的民族的解放・反ファシスト解放・反帝国主義解放の革命40周年 を迎える中で 生態史と人口統計学
1984年第6号	社会的民族的解放・反ファシスト解放・反帝国主義解放の革命40周年 を迎える中で
1984年第7号	社会的民族的解放・反ファシスト解放・反帝国主義解放の革命40周年 を迎える中で
1984年第8号	社会的民族的解放・反ファシスト解放・反帝国主義解放の革命40周年 を迎える中で
1984年第10号	ルーマニア共産党第13回党大会を迎える中で ホレアの蜂起200周年
1985年第1号	第16回国際歴史学会議大会を迎える中で
1985年第4号	ファシズムへの勝利40周年
1985年第5号	第16回国際歴史学会議大会を迎える中で
1985年第6号	ルーマニア共産党第9回大会20周年
1985年第7号	第16回国際歴史学会議大会を迎える中で
1985年第8号	第16回国際歴史学会議大会の折に（1985年、シュトゥットガルト）

¹⁵ トランシルヴァニアの農奴制や1784年のホレアの蜂起の研究で有名な歴史家であるが、後者に関しては階級闘争の観点から捉えているのが特徴的である。

社会主義期ルーマニアの『史学雑誌』に表明された西の隣国と異なる歴史認識
 —ハンガリーの『トランシルヴァニア史』（1986年）への反論をめぐって—

1985年第9号	国際青年年
1985年第10号	国際連合創設40周年
1986年第3号	ルーマニア共産党結党65周年を迎える中で 国民の歴史の中の農民層
1986年第4号	ルーマニア共産党結党65周年
1986年第7号	ミルチャ老公のワラキア公位への戴冠600周年
1986年第9号	自由と独立を求めるゲタエ・ダキア人の初期の戦い2500周年
1986年第10号	国際平和年
1987年第2号	1907年農民大蜂起80周年
1987年第3号	歴史における中世都市
1987年第4号	ルーマニア国家独立110周年
1987年第7号	マラシュティ、マラシエシュティ、オイトゥズでの戦い70周年
1987年第12号	共和国宣言40周年
1988年第4号	1848年のルーマニア人の革命140周年
1988年第7号	国外の史料の中のルーマニア人の国々のイメージ
1988年第9号	コンスタンティン・ブルンコヴェアヌのワラキア公位への戴冠300周年
1988年第11号	ルーマニア国民統一国家実現70周年
1989年第1号	ルーマニア両公国合同130周年
1989年第3号	ルーマニア農業の歴史より
1989年第5号	ルーマニア人の他民族との関係の歴史より
1989年第7号	社会的民族的解放・反ファシスト解放・反帝国主義解放の革命45周年 を迎える中で
1989年第8号	社会的民族的解放・反ファシスト解放・反帝国主義解放の革命40周年 を迎える中で
1989年第11号	フランス革命200周年

全体として「～周年」の記念特集号といったものが大半を占めていることが理解できるが、個々のテーマとしては、共産党の結党や党大会、レーニン、エンゲルス、マルクスといった重要人物の生誕ないしは没後の何周年かを記念するもの等、共産党政権時代ならではのものが多くにはまず目が引かれる。とりわけ1944年の反ファシスト解放に関するものは、その出来事が起こった8月23日が社会主義期のルーマニアにおいてはナショナル・デーであったことからその重要な度合いは突出していると言える。その他には、社会主義期の国産車の名称がダチア（ラテン語読みでは「ダキア」）であったことに象徴されるように、古代のルーマニア人の祖先の重要な部分を占めていたダキア人の建国が重視されていることも伺える¹⁶。加えて、農民蜂起とりわけ1907年の農民蜂

¹⁶ トランシルヴァニア北西部の主要都市クルージュ・ナボカ市には1969年にダチア出版社（Editura Dacia）が創設され、今日においても国内の主要な出版社の一つとなっている。ルーマニア語のみならずハンガリー語やドイツ語の図書も出版している。

起が特に重要な位置を占め、5年おきに取り上げられており、1987年になると「蜂起」の前に形容詞の「大」という言葉さえが付けられていることは特に印象的である。

本稿で焦点が当てられているトランシルヴァニアがハンガリー領からルーマニア領になることが同地のルーマニア人の代表者たちによって宣言された1918年に関しては「ルーマニア国民統一国家実現」として、社会主義期末期には5年おきに特集号として取り上げられている。この統一宣言がなされた同年の12月1日は1990年以降にルーマニアのナショナル・デーになるのであって、それ以前はナショナル・デーではなかったが、社会主義期が終わる頃までに既にその重要性はある程度は認識されるようになってきていたということがここからも読み取れる。

先に触れたように、『史学雑誌』には毎号、巻末に書評や新刊紹介に相当する項目が設けられており、新刊の紹介もなされている。もちろん首都のブカレストを始めとして、クルージュ、ヤシ等、国内で刊行された研究書、史料集、学術論文が大半を占めているが、パリ、ロンドン、エディンバラ、ケンブリッジ、パリ、ジュネーヴ、ローザンヌ、マドリッド、ブリュッセル、パッサウ、グラーツ、ローマ、ミラノ、ベルリン、ワルシャワ、ヴロツワフ、プラハ、ブラチスラヴァ、ブダペスト、サライエヴォ、ベオグラード、ソフィア、アテネ、テッサロニキ、モスクワ、アンカラ、北京等、ヨーロッパやその他の地域で出版されたものでも、号によっては少しずつ取り上げられている。但し、近年の研究成果については、これらの項目ではなく、「現代歴史学の諸問題」の項目の方で、より包括的に取り上げられることもあった。その中でとりわけ重要なものが次に述べる『トランシルヴァニア史』への批判的な論評である。

2. 1987年の春から夏にかけて『史学雑誌』に掲載された書評論文

本稿の「はじめに」で触れたように、1986年、ハンガリーの首都ブダペストでは大著の『トランシルヴァニア史』が出版されるに至った。前述のように、トランシルヴァニアは社会主義期もルーマニア領となっているため、ルーマニアの歴史家たちにとって、隣国で刊行された、国内の一つの地方の歴史を取り上げているこの通史書は決して見過ごすことのできないものであった。彼らの反応が公的な形で示されたのは1987年の4月から7月にかけて刊行された『史学雑誌』においてであった。ルーマニア側の反応は熱情的なものであり、同年2月に当時のチャウシェスク大統領が自ら激しい演説を行い、これは同年2月に党の機関紙『火花』(*Scinteia*)にも掲載された¹⁷が、ルーマニアの歴史家たちもこれを受けて行動に移ったということになるのである。

¹⁷ Bucur, Costea, *op.cit.*, p.282.

(1) 「ハンガリー科学アカデミーの後援のもとでの歴史の意識的な捏造」¹⁸ (4月号)

1987年に刊行された『史学雑誌』のいずれの号も手に取って表紙を見る限りでは、『トランシルヴァニア史』への反論が掲載されていることは判別できない。前述のように、表紙にも目次の抜粋は掲載されているが、スペースの関係で目次の全てが表記できないということもあるためである。しかしながら、同年4月号の表紙をめくり、最初の1枚目に記載されている、より詳しい目次の方を注意深く見てみると「現代歴史学の諸問題」の箇所に「ハンガリー科学アカデミーの後援のもとでの歴史の意識的な捏造」というタイトルが目に入ってくる。そして、本文を読み始めると以下のような文章で始まっているため、『トランシルヴァニア史』を批評しているものであることが一目瞭然となる。引用がやや長くなるが、ルーマニア側の姿勢を理解するためには重要であるので、以下に記すこととする。

ハンガリー人民共和国科学アカデミー出版社において研究者の集団によって実現された、合計約2千頁にわたる3巻本の通史書である『トランシルヴァニア史』(*Erdély Története*)が最近、日の目を見たが、責任を持つ編集者はハンガリー人民共和国の文化大臣であるケベツィ・ペーラであった。ハンガリーの研究者グループの研究の対象は、古くからのルーマニア人の領土であるトランシルヴァニアであり、ルーマニアの歴史家たちの間で興味が沸き起こったのは当然である。旧来の秩序や旧来の歴史学において広まっていた古い民族主義的で排外主義的なテーゼや固定観念をハンガリーの歴史家たちがどのように放棄したのかをルーマニアの歴史家たちが知るのは当然であるためなおさらである。

ケベツィ・ペーラが編集した『トランシルヴァニア史』はこの期待に全く応えていない。残念ながら、同書のテーゼと結論に関していえば、排外主義的で領土修正主義的な傾向の旧来のハンガリーの歴史学と相違ない著書の前に我々はいることを真っ先に認識するのである。この著書の頁をめくると、読者は時間の枠組みから信じられないような逸脱がなされているかのような印象を与えられるが、それは1986年にハンガリー科学アカデミー出版社によって印刷された冊子が40年以上も前に執筆されたかのように見えるからである。しかしながら、同書が我々の時代において、最高の学問機関のお墨付きのもとで、ハンガリー政府の閣僚の一人を編集責任者として印刷され、日の目を見たということは現実なのである。

ルーマニアの専門家たちは『トランシルヴァニア史』を分析し、この著書の本文の中で扱われている主要な問題の一つ一つにおいて所見を述べるものとする。今、我々が望むことは、以下の唯一の結論以外に到達しえない評価の必要な要素

¹⁸ Ștefan Pascu, Mircea Mușat, Florin Constantiniu, “Falsificarea conștientă a istoriei sub egida Academiei Ungare de Științe”, *Revista de istorie*, tom 40, nr.4, aprilie 1987, p.418-429.

を明示するために、同書に関する包括的なイメージを我々の読者に提供するということである。その結論とは、トランシルヴァニアの歴史、また、暗黙に示されるところのルーマニア民族の歴史の無作法な歪曲、我が民族に対して有害であるのみならず侮辱的なテーゼの流布、ルーマニアの領土の一体性に異議を申し立てるような熟考された試みの前に我々が置かれているということである。ゲタエ・ダキア人の祖先の継続性、ダキア・ローマ起源、祖先伝来の揺籃の地の中での継続性、中世におけるルーマニア人の一体性と彼らの政治的法的地位、トランシルヴァニアのルーマニア人の民族的社会的解放の闘い、独立のためになされた大きな戦闘、国民統一国家の達成並びに世界史におけるルーマニア人の位置といった、ルーマニア民族の根本的な問題において、ルーマニア人の過去のこれら全ての本質的な座標の中で、『トランシルヴァニア史』の著者は、以下に見られるように、歴史的現実の正反対に位置しており、歴史的真相を歪曲し、捏造しているのである¹⁹。

この論稿は当時のルーマニアの歴史家の重鎮と言えるシュテファン・パスク、ミルチャ・ムシャット、フロリン・コンスタンティニウといった3名による共著である。目次を見た限りでは12頁分のスペースが割かれており、それほど長くはないかのようであるが、本文を見てみると、文字が極めて小さく1頁につき65行がレイアウトされており、全体としてはかなりの分量となっていることが理解できる。このようなルーマニアの重要な歴史家たちが、古代から現代に至るまでの歴史全体にわたって本格的な批判を述べようとしていることが上記の冒頭の三つの段落に明示されていると言える。本稿のそれ以降の部分では個々の事項について一つ一つ問題点を指摘している。

最初に古代史の部分であるが、ローマ帝国に支配される以前に現在のルーマニアの地に幅広く分布していたダキア人の捉え方に関する記述への批判がなされている。考古学的調査の結果、トランシルヴァニア各地にダキア人の遺物が多数発掘されていることを指摘し、『トランシルヴァニア史』において彼らの国王であるデチェバルは「毒杯を飲んで」死亡し、「ダキア人の支配者層は大量に自殺した」と81頁に記されていることを非難している²⁰。

また、ローマの征服者によってダキア人は撲滅したのであり、ダキアは無人の地となっていたという説も誤ったものであるとし、ドナウ川北部にもダキア人は幅広く居住し続けたと指摘している。896年にハンガリー人がパンノニア平原にやって来て、カルパチア盆地の内部に侵入した際にルーマニア人は何世紀も前から住み続けており、そのこと

¹⁹ *Ibidem*, p.418.

²⁰ *Ibidem*, p.418-419.

は国王ベーラの匿名の年代記にも記載があると主張している。この匿名の年代記著者の方が『トランシルヴァニア史』の著者たちよりはるかに真実に近いとしている²¹。

さらに、1241年の大規模なタタール人の侵攻で利益を得たのはルーマニア人であり、彼らはその時に南の方のブルガリアやセルビアから荒廃した領域に流入したのであるとの説に反論している。また、1348～1349年のペストによりハンガリーの人口が激減した際にルーマニア人がやって来たという主張は学問的な議論ではないのではないかと疑問を呈している²²。

近代に関して言えば、1848～1849年にはルーマニア人については暴力の側面が強調されていることを指摘している。「撤退しようとしているルーマニア人の反乱者たちは、「純粋な反抗心により」学校や図書館のあるアユド (Aiud) に火を点け、ハンガリー人の町に血の流れるような恐るべき行為を組織した」と1413頁に記載されている部分も引用している²³。

第一次世界大戦以降の時代については、史料は多数あるのに「ふさわしいデータや文書が不足しているので」(10頁) あっさりとしか記述されていないことを批判している。1918年のトランシルヴァニアのルーマニアとの統合は、低開発国への併合のためにトランシルヴァニアの人々にネガティブな結果をもたらしたという記述箇所も非難している²⁴。

第二次世界大戦期に、ハンガリーのホルティが征服した領域からは「約9～10万人というかなりのユダヤ系住民が移送された」一方で、ルーマニアでは「387,000人のユダヤ人が殺害された」(1757～1758頁) という箇所も捏造であるとする²⁵。この時期については『史学雑誌』の翌月号でより詳細に論じられることになる。

(2) 「ホルティのテロルの犠牲者たちの記憶を侮辱し、冒瀆する歪曲と捏造」²⁶ (5月号)

『トランシルヴァニア史』批判は4月号のみで終わることはなかった。続く3ヶ月にわたって継続されることとなるのである。同じく「現代歴史学の諸問題」の項目において論考が一本ずつ掲載されるのであるが、こちらにおいては個別のトピックを取り上げて、それぞれについて集中的に反論が展開されている。

まず5月号では「ホルティのテロルの犠牲者たちの記憶を侮辱し、冒瀆する歪曲と捏造」と題する論文が掲載されている。著者は一人のみであり、オリヴェル・ルスティヒである。彼は1926年、現在のクルージュ県に生まれた人であり、アウシュヴィッツの絶滅収

²¹ *Ibidem*, p.418-419.

²² *Ibidem*, p.421.

²³ *Ibidem*, p.424. なお、この町のハンガリー語名はナジエニェド (Nagyenyed) である。

²⁴ *Ibidem*, p.426.

²⁵ *Ibidem*, p.426.

²⁶ Oliver Lustig, "Denaturări și falsificări care jignesc și profanează memoria victimelor terorii horthyste", *Revista de istorie*, tom 40, nr.5, mai 1987, p.515-530.

容所を生き延びたユダヤ人であるが、歴史家というよりも作家である。但し、1985年には出版された『ルーマニア北西部におけるホルティ・ファシストのテロル』²⁷という研究書も出版され、彼もその6人の著者の中に含まれているなど、歴史に関わる著作も残している人であり、そのような経緯もあり、『史学雑誌』にも寄稿しているのである。

この5月号の論文の中で、ルスティヒは、2千頁つまり約9万行もの本書の中で、北トランシルヴァニアのユダヤ人のホルティによる絶滅政策に4行半しか当てられていないことを激しく非難している²⁸。以下がその全文であるとして引用されている。『トランシルヴァニア史』の1757頁に記載されている文章である。

ドイツによる占領の後、1944年、ハンガリー当局は、進歩的な知識人たちや例えばマールトン・アーロンのような教会の上層部による勇気ある抗議にもかかわらず、北トランシルヴァニアのユダヤ系住民の大半すなわち約9～10万人もの人々をドイツの強制収容所に移送し、破滅を宣告した²⁹。

「北トランシルヴァニアのユダヤ人の物理的な除去をこれほどまでに縮小していることは人類の歴史の中で最大の殺戮の一つを歪曲するような軽視であり、上記の文章は許しがたい省略のみならず一つ一つの主張や一つ一つの単語によって、歪曲し、捏造し、世論をだますものとなっている」³⁰とルスティヒは述べたうえで、この短い文章を一字一句、粘り強く批判している。

冒頭の「ドイツによる占領の後」という部分に関しては、この文章はこのような言葉で始められているが、それまで、すなわち、1944年3月のドイツによる占領までは、北トランシルヴァニアのユダヤ人には何も起こらなかったのだろうかかと読者は自問自答せざるを得ないと指摘する。ホルティの将校や兵士の弾丸で殺された北トランシルヴァニアの村や町の痛ましい多数の犠牲者たちの名でもってこれを拒絶する義務を感じるとルスティヒは述べている。専横なウィーン裁定に基づき、ルーマニアの北西部に侵入することによって、ホルティの抑圧的な統治機構全体はルーマニア住民に対して矛先を向け、何千もの個人的・集団的犯罪をはたらき、村や町で略奪し、虐待し、同時に恐怖をまき散らし、その野蛮さにおいて前例のないテロルを確執したのである、とも言及している³¹。

国境を越えた最初の頃から既に、犠牲者の中にはルーマニア人と並んでますます多くのユダヤ人が数えられており、1940年9月のトラズネア（Trăzneia）での大虐殺では、7

²⁷ Mihai Fătu, Mircea Mușat (coord.), Ion Ardeleanu, Gheorghe Bodea, Oliver Lustig, Ludovic Vajda, *Teroarea horthysto-fascistă în nord-vestul României: septembrie 1940-octombrie 1944*, București, Editura Politică, 1985.

²⁸ Lustig, op.cit., p.516.

²⁹ *Ibidem*, p.516.

³⁰ *Ibidem*, p.516.

³¹ *Ibidem*, p.516.

人のユダヤ人も殺されたと紹介している。また、1941年のカメネツ・ポドルスクの2万人以上の犠牲者のうち、約1万6千人は北トランシルヴァニアとウクライナのユダヤ人たちの中からホルティ当局によって供給されたものであるということも指摘している³²。

次の「1944年、ハンガリー当局は、進歩的な知識人たちや例えばマールトン・アーンのような教会の上層部による勇気ある抗議にもかかわらず」の部分については、ここでは具体的に少なくとも権威のあるハンガリーの知識人が署名している史料や覚書を少なくとも一つは引用されるべきであると批判している。ゲッターにいた我々はそのような抗議をひたすら待ち望んでいたが、その当ても追放が行われている最中もそのような抗議の声は聞かれなかったと指摘している。唯一、言及されているマールトン・アーンが勇気を持って抗議したのは確かであるが、彼はハンガリーの教会の上層部にいたのではなく、アルバ・ユリアすなわちルーマニアに管区がある司教であったとする。彼はそこから一時的に越境し、1944年5月18日にクルージュの聖ミハイ大聖堂で抗議の言葉を口にしたために、まさにその月の末にはホルティのハンガリーに占領された地域で「望まれない人物」となり、送還されたのであるとも付け加えている³³。

「移送した」という表現さえもルスティヒの批判の対象になっている。ホルティの憲兵隊や警察は正確さと精密さと熱意でもって、あらゆる村や町のすべての家々を探し回り、早くから作成されていた「住民台帳」や「特別なリスト」のデータに基づいて北トランシルヴァニアの全ての人を「一人一人」ゲッターに集め、その後、80～90人ずつ家畜用の貨車に乗せて、50の車両の列車に乗せて死へと追いやったのであるとルスティヒは主張しているのである³⁴。

「9～10万人」という人数もホルティによる犯罪の規模を縮小しようという故意の傾向としてしか説明されえないものであるとして拒絶されている。ホルティ政権によって実施された1941年の国勢調査によれば、北トランシルヴァニアには15万1125人のユダヤ人がいたが、反ユダヤ人的な法律により、キリスト教徒ではあるものの、両親あるいは祖父母のみがユダヤ人である人々も迫害やゲッターへの収容、追放にさらされていることも知られている。従って、人数は約10パーセント増加するのである。確かなことは、専門的な文献の中で知られているデータによれば、トランシルヴァニア北部のユダヤ人の数は16万6千人以上であり、そのうち15万人以上がホルティ当局によってビルケナウ・アウシュヴィッツに追放され、他方、約1万5千人がウクライナに移送されて命を失ったのであるという³⁵。

³² *Ibidem*, p.516-517.

³³ *Ibidem*, p.517.

³⁴ *Ibidem*, p.518.

³⁵ *Ibidem*, p.519. なお、2009年10月8日にブカレスト市の中心部にルーマニア政府によって設置されたホロコースト記念碑には「1944年の春、ルーマニア北西部の占領者のハンガリー当局は13万5千人のトランシルヴァニアのユダヤ人を追放し、彼らはナチス・ドイツによってアウシュヴィッツで虐殺された」と記されている。

彼自身がホロコーストの被害者であったということもあるが、強い執念でもって『トランシルヴァニア史』を非難する論調となっていることが以上からも伺える。

(3) 「ルーマニア民族とルーマニア語の形成に関する誤ったテーゼ」³⁶ (6月号)

翌月号になると、主題は古代史へと時代を遡るものとなるが、ルーマニア人の本質にかかわる問題が取り上げられる。同じく「現代歴史学の諸問題」の項目に掲載されているが、そのタイトルは「ルーマニア民族とルーマニア語の形成に関する誤ったテーゼ」である。古典文献学の専門家であるヤンク・フィッシャーやドゥミトル・ベルチウ、ルチア・マリネスク、ゲオルゲ・トゥドルといった4人の共著論文となっている。冒頭の二つの段落で『トランシルヴァニア史』への真っ向からの批判が明確に打ち出されているが、それは以下の文章である。

議論の余地なく、今日の歴史叙述の要請の一つは、より遠い過去あるいはより近い過去に起きた出来事や現象に光を当て、これらが教訓として利用され、諸民族間の平和、理解、協力の精神において大衆を教育するのに貢献するようにすることである。ますます拡大し、注目されている歴史・考古学の研究の結果によって無効にされているような誤ったテーゼは、学問的観点から有害であるだけでなく、諸民族の協力や友好も同様に損なうものである。しかしながら、過去の教訓が常に正当な形で理解されているとは限らないようである。最近、ブダペストで出版され、ハンガリー人民共和国ケペツィ・ベーラ文化相の後援のもとで編集された『トランシルヴァニア史』がそのケースである。ルーマニア人の古来の輝かしい土地の歴史を扱いつつ、ハンガリーの歴史家たちは、何十年も前に流布した極めて反動的なプロパガンダの闇の中から、歪んで創られ、歪んで使われる道具を取り出し、約200年前より政治的キャリアを築き、今もお築いている日和見の擬似歴史家からあまりかけ離れていないような妄想の主張を述べているのである。でっち上げられ、偏見があり、客観性や歴史の真実の感覚から極めてかけ離れているこのような思想やテーゼは、領土修正主義的かつ排外主義的な政治行動を正当化するような議論として先験的に受け取られているのである。

本書の著者たちは、ただ単に通り返りに、悪しき思い込みと、ルーマニア民族やその祖先の尊厳を侮辱しようという明らかな意図をもって、デチェバルの時代におけるダキア人とローマ人の間の戦争を参照している。これらの戦争はヨーロッパのこの地域の歴史的発展に大きな重要性のある世界史の事件であるにもか

³⁶ Dumitru Berciu, Lucia Marinescu, Iancu Fischer, Gheorghe Tudor, "Teze false privind formarea poporului și limbii române", *Revista de istorie*, tom 40, nr.6, iunie 1987, p.632-640.

かわらず、著者たちは、ダキア民族はこの二つの戦争で「虐殺された」という明らかで上げられた結論を表明しうるだけのために取り扱っているのであり、こうしてトランシルヴァニアにおいてハンガリー人が後世に建国の礎を築いたのは、ダコ・ローマ人が全く住み続けていないような空間においてなされたのであるという、いかなる根拠もないような考えを設定しているのである。(後略)³⁷

自民族の根幹を否定されたかのような状況であったために、4人の評者はこのように極めて激しい論調で述べているが、それ以降の段落で具体的に問題のある語句を取り上げています。例えば「最初からハンガリーの歴史家たちにとって主要な議論となっているのは、「ダキアは男たちによって搾り取られ」と記しているエウトロピウス³⁸の文書であり」、「撲滅」、「ダキア人の膨大な人命の損失」、「住民の人口のかかなりの減少」、「ローマのくびきの下からの逃走」、「過疎化」、「住民の大量虐殺」(80、82頁)はダキアとローマの間の戦争の終焉後の住民の状況に関する著者たちの慣用表現である³⁹と指摘している。101～102、105～106年のローマ帝国軍との戦いでダキア人は虐殺され、トランシルヴァニアの地には誰もいなくなったという記述はルーマニアの歴史家たちにとって全く受け入れられないものであった。

ダキアがローマ帝国領であった期間は165年間(106～271年)に過ぎなかったためにローマ化は十分には進行しなかったという主張にも反論がなされている。例えば、ギリシアは紀元前146年に征服され、帝国崩壊までローマ帝国領だったが決してローマ化されなかったのは、ギリシア語の文化の名声はローマ化を妨げたのだと述べている。また、ローマ化というものは、ラテン語の母語話者が十分な人数で存在し、土着の住民にとってラテン語の習得の動機が存在する場所でしか起こらないが、ローマ軍兵士や帝国の役人、商人、職人が幅広く分布していたダキアではそのような条件が満たされていたと主張している⁴⁰。ダキア人がローマ帝国の人々と混ざり合っただけでルーマニア人が形成され、彼らは今日のルーマニアの地に住み続けてきたと主張するのがルーマニアの側の一般的な歴史認識であるが、これはトランシルヴァニアの先住権をめぐる問題であるために、ハンガリーの歴史家たちの叙述は容認し難いものであったのである。

(4) 「悲しき思い出の帝国へのノスタルジー:オーストリア=ハンガリー君主国」⁴¹ (7月号)

続いて7月号でも「現代歴史学の諸問題」の項目に『トランシルヴァニア史』を非難

³⁷ *Ibidem*, p.632.

³⁸ ローマ帝国後期の4世紀の歴史家。

³⁹ Berciu et al., *op.cit.*, p.633.

⁴⁰ *Ibidem*, p.637-638.

⁴¹ Nicolae Edroiu, Constantin Căzănișteanu, Ladislau Gyémánt, Ion Pătroiu, “Nostalgie după un imperiu de tristă amintire: monarhia austro-ungară”, *Revista de istorie*, tom 40, nr.7, iulie 1987, p.742-753.

する論考が一本、掲載されているが、それは4人の著者（ニコラエ・エドロイユ、コンスタンティン・カザニシュテアヌ、ラディスラウ・ジェーマント⁴²）、イオン・パトロイユ）によるものである。「悲しき思い出の帝国へのノスタルジー：オーストリア＝ハンガリー君主国」と題しており、今度は近代後期の約50年間を取り上げたものとなっている。

同論文は『トランシルヴァニア史』によるオーストリア＝ハンガリー二重君主国の時期の捉え方について批判的な論評を繰り広げている。最初に「上から課された1867年のアウスグライヒは、オーストリアとの関係に関して、すなわち国外に向けてのみならず、一般大衆との関係に関して、すなわち国内に向けては1848年革命に保守的な方法で終止符を打ち、ハプスブルク帝国を「双頭の」立憲君主国へと変容させた」（1624頁）という記載は不十分で適切でない定義であるとして非難している⁴³。

トランシルヴァニアにとって新しい体制はその政治行政面での自治の廃止と、その地域の大半を占める住民であるルーマニア人の反対を無視してなされたハンガリーへの併合を意味した、と述べている。1867年の合意はオーストリア＝ハンガリーに抑圧されているルーマニア民族や諸民族のますます強まる主張を妨げようとするものであったと言及している⁴⁴。

エンゲルスの「もし明日、ペテルブルクの専制主義が崩壊するとすれば、明後日にはオーストリア＝ハンガリーもまたヨーロッパにはもはや存在しないだろう」⁴⁵という言葉を用い、エドロイユらは自らの主張を正当化しようとしている。加えて、ハンガリー人の歴史家ハナーク・ペーテルが「二重制の最大の特徴は民族抑圧の特別なシステム、オーストリア・ドイツとハンガリーの支配階級の間の諸民族への支配の分配であった」⁴⁶と述べていることも挙げて、ハンガリー人の側でもルーマニアの歴史家が同調できるような見解を述べている者もいることを指摘している。

続いて、ルーマニア人に関し「立憲制、並びに、トランシルヴァニアのルーマニア人とハンガリーのルーマニア人が単一の陣営の中で一緒にになれる」という「歴史的贈り物」を「評価することができないでいた」（1647頁）という記述に対しては猛烈に反発している。立憲制は抑圧の制度であるとし、また、英国の歴史家シートン・ワトソンの「トランシルヴァニアが一つのまとまりである限り、その内部のルーマニア人は、権利を持

⁴² 名前からすればハンガリー系であるが、オラデア生まれの近現代史家であり、1970～2010年にはルーマニア・アカデミーのクルージュの歴史学研究所員であった（Stelian Turlea, “Ladislau Gyemant: „Istoria Transilvaniei oferă un fascinant câmp de studiu”, *Ziarul Financiar*, 24 februarie 2011 (<http://www.zf.ro/ziarul-de-duminica/ladislau-gyemant-istoria-transilvaniei-ofera-un-fascinant-camp-de-studiu-de-stelian-turlea-8009817>) (2017年1月6日閲覧))。

⁴³ *Ibidem*, p.742.

⁴⁴ *Ibidem*, p.742.

⁴⁵ *Ibidem*, p.743.

⁴⁶ *Ibidem*, p.743.

たなくても、住民の過半数を占めており、将来、自らを主張するという理にかなった確信を持っていた。ハンガリーへの併合は、たとえ周辺部の諸県の同胞と結びついたとしても、ルーマニア人を聖なる王冠（中世ハンガリー王国の象徴のこと）の諸地域全体の中の僅か15%に過ぎない無力な少数派へと追いやった⁴⁷という言葉も引用し、1867年以降はハンガリー王国全体ではルーマニア人はむしろマイノリティーになったことも強調している。

当時のルーマニア人が低い地位に置かれていたことを示すものとして、1868年の民族法の第17条では、諸民族が居住する地域の公立学校では教育言語として当該民族の言語も導入される義務が国家に課されているにもかかわらず、トランシルヴァニアにおいては、二重制の時代にルーマニア語で教えられる学校は初等教育においても中等教育においても存在しなかったと指摘している⁴⁸。

さらに、1914年12月にロンドンで発行された『現代雑誌』(*Contemporary Review*)においてトランシルヴァニアの司法の状況がどのように機能していたのかが以下のように記載されていることを引用し、ルーマニア人の境遇が困難なものであったことを強調している。

ルーマニア人の諸県において任命された上級の役人や裁判官は皆、ハンガリー人である。弁護士はハンガリー人であり、陪審員はハンガリー系住民の中から選ばれている。その結果、哀れなルーマニア人は母語でない言語で他民族の裁判官によって裁判を受け、その前で他民族の弁護士を通じて自らを主張しなければならないが、判決は他民族の陪審員によって与えられるのである。(中略)その結果、ルーマニア人の市民は自分自身の国の役人と自由に議論することができないのであるが、その役人は自らの利益を守る目的で任命され、自己負担で報酬を支払っているのである⁴⁹。

また、『トランシルヴァニア史』の著者たちはルーマニア人が劣等の民族としてみなしているとエドロイユらは述べているが、その例の一つとして、トランシルヴァニアの主要な民族の一つであるザクセン人に関し、1646頁で以下のように記述されている部分を引用している。

ザクセン人市民の二重制国家への統合は、実現された一つの可能性として、民族政策の分野における妥協に傾いた政策の可能性と限界の一つの指標である。あ

⁴⁷ *Ibidem*, p.743.

⁴⁸ *Ibidem*, p.745.

⁴⁹ *Ibidem*, p.745.

る民族の政治的支配層が二重制やハンガリー国家の強化の必要性を受け入れ、ハンガリー化のとりわけ外的な表明を前に観念したなら、諸政府は彼らの宗教的文化的機関を支援し、人々を中位あるいは下位の要職に残し、自分たちの形態で都市や地方を組織し、国家の中で独特のカラーを出すことを彼らに認めたのである。そのような妥協の政策をとることができたのは、機関の広範なネットワーク、指導者層を有し、確固たる地位を享受している民族である。あまり発展していない民族は、たとえザクセン人よりもその人数がはるかに多かったとしても、彼らの指導者層が政府の対話者に到達しうるまでに長く錯綜した道のりを経なければならなかったのである⁵⁰。

ここで「あまり発展していない民族」が何を指すのかは記載されていないものの、ルーマニア人を指していることは明らかであり、さすがにルーマニアの歴史家たちの逆鱗に触れ、「著者たちの偽善は最大級の侮蔑でこの上ない頂点に達している」⁵¹などと述べられるに至ることとなったのも当然であろうと判断されるものである。

おわりに

続く8月号、また、それ以降の号においては、本テーマに関する論考はもはや何も掲載されていない。『史学雑誌』における『トランシルヴァニア史』批判は4ヶ月続いた後に終止符が打たれたものとみなすことができる。4月号で全体的な批判がなされた後、個別のトピックに絞って、現代（第二次世界大戦期）、古代、近代という順に反論がなされたということになるが、論調は極めて激しいものであり、良い面の指摘はほぼ皆無である。全般的にやや感情的かつ一面的であり、批判がやや一部の側面に偏っていると言える。但し、国内外の文献や史料を適宜、引用し、説得力のある論理を展開しようという意図はうかがえ、実際に、ハンガリー側の主張もかなり偏ったものであることを読者は理解することができる。『トランシルヴァニア史』の中には民族の起源といった、ルーマニア史の根幹に関わるような諸問題にも触れられており、その他の点も含めて両国で

⁵⁰ *Ibidem*, p.746-747.

⁵¹ *Ibidem*, p.747.

⁵² 例えば、2006年以降にルーマニアで発行され、使用されている4年生用のハンガリー語の歴史の教科書では、掲載されている欧州各国の地図の中でルーマニアの国旗だけが省略されていたり、国王カール1世の人名がハンガリー語でカーロイ1世と記されたりしていることが2017年になっても指摘されるなどして、物議を醸している (Costel Crangan, "Istoria României, falsificată pentru elevii secuii în manuale aprobate de Ministerul Educației și tipărite din bani publici. Tricolorul, înlocuit cu steagul secuiesc", *Adevărul*, 3 ianuarie 2017 (http://adevarul.ro/locale/galati/istoria-romaniei-falsificata-manuale-scolare-aprobate-ministerul-educatiei-tiparite-bani-publici-1_586a4ae35ab6550cb801a57e/index.html) (2017年1月3日閲覧))。

まさに正反対の歴史認識がしっかりと定着しており、折り合いをつけることの難しさは痛感せざるをえない。幸いにしてこの地域での紛争の勃発は回避されているが、今日でも両国の対立は完全には消え去ってはならず、この問題は看過しえないものとなっている⁵²。2006年に両国の首脳の間で共通の歴史教科書を編纂するという構想が取り決められ、かすかな希望が浮上した時期もあった⁵³が、本質的な部分が解決していないため、この試みは未だに実現されていない。

なお、トランシルヴァニアを対象とする通史書は、実はルーマニア側でも社会主義期においてそれ以前に出版されている。ルーマニア人民共和国アカデミー出版社による *Din istoria Transilvaniei* (『トランシルヴァニア史より』) であり、第1巻(全232頁)は1960年、第2巻(第462頁)は1961年に刊行されている⁵⁴。第1巻は1961年に第2版(全356頁)が、1963年に第3版(全356頁)が、また、第2巻は1963年に第2版(全552頁)が出版されている⁵⁵。著者の中にはシュテファン・バスクも含まれている。頁数は初版よりも増えているが、二つの巻を合わせても1千頁にも満たず、ハンガリー側の『トランシルヴァニア史』の半分以下の分量である。第1巻は古代より1848年まで、第2巻は1918年まで、第3巻はそれ以降の時代を扱うものとされているが、実は第3巻は発行されていない。上記の1987年の4ヵ月にわたる書評論文の中では、*Din istoria Transilvaniei*は全く言及されていないが、これはルーマニアの歴史家がハンガリーの同僚に引け目を感じ、「先を越された」という感情によるものであろう。通史書を描くことの難しさがここからも感じられる。

本稿においては紙幅の都合により分析の対象を1987年に発行された『史学雑誌』の4冊に絞っているが、社会主義期における他の時代、もしくはポスト社会主義期における歴史認識の問題を他の史料や文献も用いつつ、より包括的に検討することは今後の課題としたい。

※本稿は、平成24～28年度科学研究費補助金基盤研究(A)(一般)(西洋史)「社会主義期東欧ロシアの歴史学」(課題番号24242029)(研究代表者:大阪教育大学教育学部教養学科渡邊昭子准教

⁵³ 拙稿「移行期におけるルーマニアの歴史教科書」『バルカン諸国歴史教科書の比較研究』(科学研究費補助金基盤研究B(課題番号16320100)研究成果報告書)2008年、31～46頁。

⁵⁴ Constantin Daicoviciu, Ștefan Pascu, Victor Chereșteșiu, Ștefan Imreh, Alexandru Neamțu, Tiberiu Morariu, *Din istoria Transilvaniei*, Vol.I-II, București, Editura Academiei Republicii Populare Române, 1960-1961, 232p, 462 p. (初版)

⁵⁵ Constantin Daicoviciu, Ștefan Pascu, Victor Chereșteșiu, Ștefan Imreh, Alexandru Neamțu, Tiberiu Morariu, *Din istoria Transilvaniei*, Vol.I-II, București, Editura Academiei Republicii Populare Române, 1961-1963, 356p, 552 p. (第2版) Constantin Daicoviciu, Ștefan Pascu, Victor Chereșteșiu, Tiberiu Morariu, *Din istoria Transilvaniei*, Editura Academiei Republicii Populare Române, 1963, 356p. (第3版)

授)、平成27～31年度科学研究費補助金基盤研究(B)(特設分野)(紛争研究)「バルカン諸国の歴史教育から見た紛争と和解の研究」(課題番号15KT0046)(研究代表者:跡見学園女子大学文学部人文学科石田信一教授)及び平成26～28年度科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)(社会学)「ヨーロッパ辺境地域における文化の政治が表象する社会空間」(課題番号26380715)(研究代表者:恵泉女学園大学人間社会学部国際社会学科定松文教授)による研究成果の一部である。

(本学教授)